

令和8年度第1回 高知県子ども読書活動推進協議会 議事録

日時：令和8年7月21日（火）13:30～15:30

場所：オーテピア4階集会室

【説明】議題（1）第四次高知県子ども読書活動推進計画の総括について（資料1～資料3）

【質疑・協議】

（委員長）

それではただいまから委員の方々のご意見をいただきたいと思います。予定時間は25分から30分ぐらいということですので、お1人当たり3、4分ほどで、ご意見をいただいてから、次期計画に関するご意見をいただくときに、関係があればまたご意見をいただくという形で、議論を進めたいと思います。よろしくお願い申し上げます。それでは、順次時計回りでご意見をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

（委員）

やはり子どもを対象とするとなると、やはり学校図書館との連携を進めていくというのがすごく重要かと思っておりますが、つい先日学校図書館担当者、教諭、また支援員、図書館との会議がありまして、支援員が入っている学校は比較的子どもたちと本をつなげるところが定期的に行われているところがあるんですけども、そうでない、支援員が入っていないところは、やはり先生がなかなかそこまで手が回っていないというところで、じゃあどういふふうにしたら先生が、一番効率的に学校図書館を稼働させていけるかってなったときに、この資料（1）「学校図書館の機能の充実」っていうところで、良い見本の学校のそういうところをどんどん配信して見本として提供していくっていうところが一番、先生にとっても、子どもたちに図書館として充実した整備を進められるんじゃないかなっていうところを考えたところでした。すいません、まとめてない意見だったかもしれないです。

（委員長）

また、推進の点は次の機会に。委員お願いいたします。

（委員）

委員のご意見と重なるところがあって、私はやはり学校司書が本当に大きなポイントだと思っています。資料3の一番下、参考データの⑤番のところ「学校司書の配置率」が、幸い三次計画の頃から微増というところなんですけども2校に1校というのは、やはり現状

としては寂しいかなというふうに思っています。学校図書館法第1条にあるように、学校図書館は学校の基礎的な設備でありますので、すごく重要だなと。逆を言うと環境が悪くても学校司書がいれば何とかなるとい面があります。地域の図書館とつなぐという点で。そうすると学校の授業もいきいきとするでしょうし、高知県内の事例を見ても学校司書が、あるいはボランティアがいることで学校図書館がいきいきしたケースもたくさんありますので、ここは大事だというふうに思っています。

総括してみると、四次計画この5年間で、やはりオーテピア高知図書館をセンター機能として着実に前に進んでいるだろうというふうに感じるところです。

ただ一方で、これは前回申し上げたことですが、県内の図書館の実情を言うと、やはり三極化している面があります。「公立図書館がない、司書がないところ」「何とか現状維持で頑張っているところ」あるいは「新館を機に大きく飛躍するところ」、この面があるだろうと思いますので、このあたりどう平準化を図っていくかというのは五次計画の大きな課題だろうというふうに思っております、以上です。

(委員長)

続けて、委員お願いいたします。

(委員)

僕も学校における読書活動っていうのは非常に重要だと思っています。学校も段々、児童も減っており、なかなか機能維持っていうのは難しい中ではあるんですけども、やはり学校っていうのが子どもたちに直接、読書活動の良さを伝える場面としては、やっぱり一番大きいのかなと思うところがございます。

その中で第四次計画、5年間取り組んでいろいろ物事が進んだものもある中で、やっぱり学校における読書活動の充実、2ページの下の方ですね、(2)の方であります、いろんな形で新しいテクノロジーや、端末の活用ということも進んでこられたということですが、けれども、一方でまだ学校図書館とかを活用した事例が少なくなってしまう、これはもう、今私もデジタルサービスちょっと担当してるので痛いほど分かりますか、利便性が上がるとして導入もいろいろしているところなんです、それがこちらが思ったような、この場合でしたら図書資料っていうようなものの活用で直接結びつくかというところではない。むしろ、どんどんテクノロジーが進化して生成AIがパッと答えを出してくれているクイック検索なんていうこともありますけれども、原点に当たらずともいろんなことを導き出すっていうような状況が生まれてくる。ちょっとなかなか予測しづらかったような状況が、この四次計画の期間でも多く進んでしまったのかなというところがございます。この辺を次の計画に、どういうふうに捉え直して取り組んでいくのかっていうのは、ちょっとお聞かせいただければ、五次計画の方も中でもお聞かせいただければなと思っております。

ちょっと質問なんです、その視点では多分一斉読書の実施校が減少傾向にあるって

うようなことがありますけども、これについて何か理由とか背景などをちょっとお聞かせいただければと思っています。

読書ということをとらまえて、この帯タイムみたいなものを別の時間に活用しているのか、そういった状況なのかなと何となく思うんですけど、お分かりだったら教えていただきたいです。

(委員長)

事務局お願いいたします。

(事務局)

すみません、こちらの資料3のということでしょうか。

(委員)

資料1の2ページの(2)に「学校における読書活動の充実」の下の方で課題に挙げられております、一斉読書活動の実施校が減少にあるっていうことの理由ですとか、背景が分かればということなんです。

(事務局)

高等学校の読書の取組だと思しますので、委員に、補足等いただければと思うんですが、やっぱりいろんな活動が高校の現場で増えてきてですね、一斉にやるというよりは特色化を出していったりとか、探究的な学習のそれぞれっていうふうに、ちょっといろんな広がりがあって、一斉にもうこの時間読書というよりは、いろんな活動に増えていった。自分が勤務した学校なんかでも新聞の切り抜きを配って、隣同士で議論してみるとか、発展的ではあるのかもしれないけれど、なかなか実施が学校として継続して全部やってるところとそうやって変わっていくところと、あと単純に時間がなくて時間割の編成なんかでっていうところもあるのが現状じゃないかなというふうに思います。

(委員)

ありがとうございます、よく分かりました。多分今おっしゃられたことだとなかなかこの傾向もあまり変わらないのかなと思いますので、またこの辺等は捉え直しをしてどういうふうに向かっていくか、つなげていけばいいのかなというふうに考えております、以上です。

(委員長)

ありがとうございます。それでは委員、お願いいたします。

(委員)

幼児期っていうのは本当に前回もお話したかと思うんですけど、絵本に出会う一番大事な時期かなと思います。取組としては、保護者への啓発なんかも引き続きやってきてはいるものの、なかなかやっぱり保護者の方も読む時間とかっていうのも限られていたりとかするし、やっぱり実際、ここ何年か子どもたちと保護者の読書っていうのを見ていくと、何かだんだんと絵本を読む回数も少ないし、時間も少なくなっているし、絵本自体の購入っていうのが本当に少なくなってきたことを切実に感じます。お家にこういう絵本がほしいなあって読書を注文をすることが年間何回かあるんです。

以前は、やっぱりクリスマスのプレゼントだったりとか誕生日のプレゼントについていうので、園でも数名結構何人かが買っていたんですけど、やっぱりそれがもうほとんどなくなってきて、もうごくごくわずかな保護者の方しか買わなくなったりとかして、そういう読書っていうのがやっぱりいろいろ親育ちなんかでも、絵本の大切さとか園でもお知らせはしていくんですけど、なかなかそれが手応えを感じにくくなってきています。

あと1つ感じるのは、だんだんと私たちも教えていただいた絵本の大切さが、若い先生たちに十分行き渡ってないかなと思います。絵本の選び方なんかもそういうのを選ぶんだなと思うようなのが、自分のクラスに選ばれてたりとか、絵本もやっぱり読んでほしいのと、いろいろ今は絵がとても目を引くものであったりとか内容はうーんって思うようなものもあったりとかして、やっぱり与える側がきちんとそういうのを研修を受けて、こういうのがいいんだよっていうのを与えられるような研修がもう少しあったらいいなと思います。

そういうことが何かお母さんにも絵本の大事さとかを伝えていけるんじゃないかなと思うので、保護者だけではなくて自分たち職員ももう少し学んでいけたらいいなと思います。以上です。

(委員長)

事務局から何かコメントありませんか。大丈夫ですか。

選書の問題があるんですよね。お願いします。

(事務局)

先生たちに絵本の選び方という話を聞いて、今度9月に教育センターの会で研修させていただくので、こんな選び方っていうのも入れてみたいなってことをちらっと思ったんですけども。そうですね、子どもたちとお家をつなげる。人が少ないとか、選び方が分からないとかいうのでいろんな機会を通じて、こういうことをしたらいいよって、こういうところで今ここではこういうことをしていますっていう情報発信をするとともに、こちらで研修の機会などを通して細やかなサポートがしていければいいなと感じました。ご意見ありがとうございます。

(委員長)

事務局に今お求めしたのは、次の次期計画のときに、この辺りが子どもの置かれた環境と、それから紙の例えば絵本のようなものの在り方の関係がかなり重要になってくると思ったからです。また次の議題で議論する。それが良いと思いますけど。

それでは、委員。

(委員)

いろいろとご説明をいただき、それからいろいろ考えるところあります。雑感みたいになって大変恐縮ですが、少し述べさせていただきます。

この資料3にあります、特に高等学校はずっと課題とされている、いわゆる不読書率の実態なのですが、おそらく実感的には1か月本当に読書をしない高校生は増加の一途をたどっている印象を非常に受けます。

ただこれをどのように取るかは、様々と思ってます。つまり、それが本当に質的の停滞を著しく招いているかどうか、その現象については、いろんな面で見るところもあると思うのですが、この基本目標Ⅱのところでは先ほども話題になりました、学校における図書活動の充実は非常に大きな課題であると思います。特に高等学校におきましては先ほどもご紹介ありましたが、例えば探究的な学びを深めるうえでの学校図書館の活用というのは長年言われてきましたし、非常にそこは主体的に取り組んできたところなのですが、おそらく、ここ本当数年で劇的な変化が起こっているというのが私の感覚です。具体的に申し上げますと、本当に生成AIの出現は今、大きな役割を占めていると思ってます。

例えば探究の授業で、何とかについての調査をしましょうと。従前でしたら、インターネット等も使いながら、自分なりに探索をする、検索をする。その中で資料を読み取ってピックアップする、それをまとめていくという作業があったのですが、おそらく今劇的にそれが生成AIによって、非常にコンパクトに示してくれる。つまり、その作業が完全に省かれる感覚があります。生成AIが目前にあるテクノロジーとして存在している。しかも、かなり急速に高校生の中でもそれを利用する率が高まっていることが実感です。

となってきたときに、例えば探究をする中で、なぜ図書なのかということをしつかりと決めてなければ、おそらく利便性って簡単な言葉ではないと思いますが、やっぱり効率性であるとか、あるいは、そこから先に子どもたちがどういうことを求めるかっていうことが想定されてない限り学習がそこで止まってしまうので、もし先ほど申し上げた質的な低下を言うならば、そこで学習が止まってしまうことは、場合によっては停滞になるかなというふうに思いますけど、その上に立って何を学んでいくのかっていうことをしつかり見定めない限り、おそらくこの傾向はさらに強まっていくというふうに思います。

そういう意味で私個人としては、基本目標Ⅰの(4)「読書活動の意義や大切さを伝える」、これはもう小中高、全く同質同等であるべきだと思ってます。ここに一貫した教育が求められるかなと思いますし、それをどうやれば実感していけるのか、それぞれの教室で行うこともあれば社会体験の中で、特に高校生なんかは、本当にそこが一番重要だと思うのですが、

自分が学んでいることが、社会にどうつながっているのかっていうことをまさに探究の中でも考えるので、それが実感できるような図書活動ともいいますか、読書活動ともいいますか、これがない限り、おそらく生成 A I にすべてを委ねていく傾向はさらに高まっていくだろうと思いますし、そして生成 A I に委ねることそのものが害悪かどうか、僕はそういう一元的な議論では当然ないと思うので、もっと総合的に見ていく必要もあるかなと思います。

そういう意味で次期計画は、かなり広い視野で見ていかなければ、学校図書館の活性化だけで議論すべき内容じゃないのかなというふうに思ってるところです。

大変すいません、まとまりのない話ですが、雑感としてお話しさせていただきました。ありがとうございました。失礼いたします。

(委員長)

この件は次の五次計画の策定のときの中心にならざるを得ない議論です。

(副委員長)

小学校の場合はやはり、1年生から6年生ぐらいまで素直で、まだ発達段階、本はやっばり身近です。もう1年から6年まで1週間に1回は必ず図書室へ行って国語と連携して、自分の本を探してきて読もうとか朝読書もやってます。だから休み時間なんか結構読書やったりとかするので、かなり小学校は身近に読む環境があります。

中学校の場合は、国語の指導事項の中に図書館の本を利用して、国語の教材を図書館と連携してやろうというのがありますので、意図的に国語の中でよし図書館行ってやろうという授業を年に1回ぐらい、それでもやるにはやってました。意図的にやっぱり教師がやらないと、図書館を利用するということが他の教科なんかすごく少なかったかなというイメージがあります。総合学習とかで調べ物をするときは、使います。国語の授業として使うことはありますということです。

ですから、僕が思うのはやっぱり学校で先生方が意図的に図書室、図書館を使って授業を組んでもらうとか図書館を利用する自分の教科によって、図書館を必ず使うことを意図的に仕掛けてもらえば格段に身近になるし、子どもが1回足を運べば、よしじゃあ今度は、あんな本あったき、あそこで調べようぜとかいう感じになるかなあということで、そこは学校の力っていうのはすごく重要なと思います。

もう1点僕が気になったのは、この資料3の①で、「家や図書館読書時間10分以上の割合」すごくやっぱり令和7年度になって、格段に小学校でも中学校でも減ってるんですけど、やっぱり家ではタブレット学習が入ってきまして、家で必ずタブレットを利用してドリルやろうねっていう時間を必ずやれっていうことになってますので、その関係で衰えている可能性もあります。もちろんタブレットで本読むことも調べ学習をすることができるので、それが如実に出てるので、ちょっと下がってるからこの目標値が高い70、60とかっていうのは、なかなか難しいところはあるかもしれません。

月曜から金曜まで数年前まで5日間朝読書をやった、10分間。それが結局、その10分間を朝の金曜日は、さっき言われましたように、国語の書き取りの勉強にしよう、水曜日は算数のあれにしようってことでまた削られていった。週に2回は朝読書やけど、あとの3回は算数と国語と国語となんかそういう、いわゆるモジュールの学習に充ててるので順々に減っている。

だから学校によってはもうそれ一切読書全部やめてお勉強にしたり、あるいは何か10分間を仲間づくりの一緒にアドジャンとかそういう仲間づくりのワーワー言いながら、ちょっと喧嘩をしないでとかそういう時間に充てたりとか学校独自でやってますので、純粋な朝読書の時間がかなり減って削られてきてるかなという感想を持っております。大変危機的なところだと思います。以上です。

(委員長)

ありがとうございます、どれを見てもやっぱり一つは子どもを取り巻く環境は、あまりにも変わり過ぎてるっていうことをどうやって考えていくか、それと関連しまして例えば、一番最近できた高知県の図書館は南国だろうと思いますけれども、その前が佐川になりますかね、生涯学習課として例えば今2つ挙げました図書館ができたことで、子どもの読書活動にどんな影響があるかっていうのは、データなんかで把握されてますか？どうでしょう。そのあたりからやっぱり、きちっと押さえておく必要があるんじゃないかという気がいたします。

それから、新しく、次は須崎ですか、できるときに、例えば生涯学習課としてはこんなサジェスションがありますよというようなことが言えるためにも、そういうきちとした、直近でできましたら、データを、それから例えば、これは別のところの会議でも出ましたけど、高知市内の市民図書館の分館分室の利用者が増えてますけれども、例えばそこで子どもが来てるのか、集まってるのかとかそういうデータをきちんと把握して、図書館と子どもの学習の関係なんかもきちんとやっぱり数値化したりして、評価をしておくっていうことがやっぱり大事なかなと思います。

その上で、これから時間をかけて、次の計画を立てるわけですね。その時の、こうなんだろうでしょうか、基礎になるような、そういう形で第四次計画の成果をですね、きちんと評価していただきたいなと思います。

一番大きなポイントは、委員もご指摘になったように、どれだけ変化していくかっていう、環境の変化にどれだけ対応するかという点だろうと思いますけど、これまた次の議題ということでお願いしたいと思います。

議題を急いで打ち切るわけではありませんけど、次の議題が重要ですので、またその時にも第1の議題に関するご意見が残ってる部分がありましたらおっしゃっていただくという形で次の議題に移りたいと思いますので、それでは第五次計画について、骨子案について事務局の方からご説明いただきたいと思います、よろしくお願い申し上げます。

【説明】議題（２）次期計画について（案）（資料４－１、４－２）

【質疑・協議】

（委員長）

ありがとうございました、骨子案ということでご説明いただきましたけれども、これからの肉付けにですね、必要な点に関して、委員の皆様のご意見を伺いたいと思いますのでよろしくお願い申し上げます。

（副委員長）

そうしたら、この長い資料４－２の真ん中ぐらにある「情報を読み取り活用できる子どもを育てる」の、（２）「学校等における読書活動の充実」の、④「１人１台タブレット端末からの電子書籍の利用」、正直これが紙の良さもあるけど、やっぱり今や小学校１年生からそのうち幼稚園になるかもしれませんけど。１年生でも普通に４月７日に入ってから使ってますので、これどんどんもうメインになるとは言いませんが、どんどんやったらいいと思います。実際もう校長会でも１年、２年前とかにおりてきてやり方も分かってるんですけど、さらに進めていけば、１回言ったけど、学校の先生と協力してやるとすごく子どもにはストンと落ちるので、その人らが将来、高校生になって大人になっていくので、もう本当に生涯に渡って読書活動に携わっていく。それで自分を高めていくことにはつながるかなという気がします。

これ本当に再度繰り返さうやってこうやって使ってくださいとか言って、どの学校はこれだけ借りてますとかいうのが情報発信していけば、学校も校長がうかうかしてられんな、うちも借りてよって言っていつて、やっぱりあるんじゃないかなっていう気はしました。これは例ですね、ひとまずこれで。

（委員長）

さっきからずっと考えておりまして、今後の議論にちょっと必要じゃないかと思いましたが、委員にお伺いしたいんですけれども、例のデジタル教材の導入っていいのか、教科書ですね、これが例えば子どもの読書にどんな影響を及ぼすか及ぼさないか、その辺の見通しが少しあったほうがいいんじゃないかと思って、先生の個人的なお考えを少しお聞かせ願えればと思います。ちょっとだけでも。

（副委員長）

個人的な意見として、それはマイナスになると思います。やっぱり読書…。人間与えられた時間と、変わらないわけなので、新しいものが入れば、そちらの方にすべて取られる。やっぱり、その組織としてもそちらを進めますので、これが今のタブレットの位置です。タブ

レットやりなさいと。毎日10分やりなさいというふうに言ってますので、今までやってなかったものが入れば入るほど、それから映像は向こうから勝手に入ってきて、入ってないって言い方おかしいですけど、やっぱり入ってます。

ですから、そっちが子どもも大人も先生も楽なので、当然もうこれ以上できない、それは構わない。だから読書活動については完全にマイナスになると思います。

よろしいでしょうか。個人的な意見です。

(委員長)

多分子どもを取り巻く読書環境がこの五次の計画の期間では大きく変わると思いますけど、その1つの要素だろうと思って伺いましたわけです。ありがとうございました。

では委員の方からまたお願いいたします。

(委員)

なんかちょっと支離滅裂な話になるかもしれないんですけども、やっぱり読書活動を進めるっていうことになると、やはり方向的なものになってくるかと思いますけれども。私がぶっちゃけ感じるのが、読書推進をこういうふうに進めていくことと、現場との乖離がすごく非常にできてるなっていうことを感じます。

純粋に読書ってというのは、本を読むことが楽しい、本を通じてこういうイマジネーションが広がったりってところが本を読むってことの原点の楽しさだと思うんです。でもそれがどうしても今、学習、習得みたいな感じになっていて、そこを前面に出すと関心が向いて、そこに保護者とか注目をしてくるっていう。

でも、基本的に子どもってというのは、もう本が大好き。本当それはもう、中国の方から、急に転校してきた子ども、日本語何にも分かんないんですけど。中学校の読み聞かせに入って行ってまして、読んでると、もう日本語も分かんないから、いつもうつ伏せているんですけど、そこになると、ちらっとやっぱり顔上げてくるんですよ。なので、もう本当子どもってというのは、本も好きっていうのが純粋にそうだと思うんですが、そういうことがあって、この間の支援員さんとか学校図書館が集まった会議も熱心な支援員さんが図書室にいて、子どもたちがこんなふうに読みたいなあっていう、リクエスト的なものがやっぱり来るそうなんです。でも学校には資料費もそんな豊富じゃないし、本が断然ないと。で、市立図書館の方調べてみたら、こんな本あるな、じゃあ私借りてきてあげるよっていう感じで。個人的に本当にその子が好きであろうからそういう活動をやったそうなんですよ。

でも、実際それは自分のマイカー出してなので、そういうのを業務としては認められないよ。ほかの図書支援員さんにしたら、いやいや私達そういうの求められたら私はできないよっていう人もいる。

結局、熱心に子どもの読みたい本を勧めようと思うと、図書室だけでは完結できないので、実際に図書室を出て、図書館に借りて、子どもに本を渡してあげる。でも、それは旅費も出

ない。そういう業務としては認められないっていう支援員さんへの配属へのルールじゃないけど、そういう基準があるので、じゃあ私もできるだけ図書室出ないようにします、みたいなことになって、それが現実になってきました。

でもそこでも、何とかやっぱり子どもの好きな本を届けるにはどうしたらいいかっていうふうに四苦八苦して、参考になるかどうか分からないんですけど。そういうふうに、もし子どもたちが図書室に来て、こういう本を読みたいってなったときに、それはやはり子どもが図書館に来て借りるのが基本であろうと。だから低学年の場合は保護者さんにまずそれを知ってもらってっていうところで、こういう紙を作って、各図書支援員さんが入っているところには支援員さん通じて支援員さんのいないところは学校図書館担当教諭からこういうものを出してもらう。1つの方法なんですけど。そういうふうにして、少しでも読みたい本に近づけてあげるっていうのを1つみんなで考え出しました。

そしてあとですね、中学校の現状なんですけど、毎朝の10分間朝読書っていう時間があるそうなんですけど、やっぱりあの学期のテスト前になると、その10分間を学習に充ててるそうなんです。先生が正しいと言っているのかもしれませんが。でも私そうなのかなと思って、やっぱり読書は読書、ここは譲れないよっていうところで、そこは子どもたち実際あんまり本が好きな子じゃない子にとったら、そこ勉強に充ててよって思う子もいるかもしれないんですけど、やっぱりその10分間をちゃんと確保して、本を読むっていう、本に限らず冊子でも何でもいいんですけど、そういうふうを読むという時間を譲らず、確保していくっていうところも、またその読書の世界っていうものをちゃんと受け皿として、大人たちもちゃんとそういうふう読書の時間を大事にしてるんだよっていうところを見せる1つではないかと思います。

あと保育園児に関しては、図書館はスタッフが各保育所に毎月だったりとか年間通じて各保育所へ2回、読み聞かせに出向いて行ってます。それがお誕生日会のときの読み聞かせコーナーになったりとか、そういうのを実践してるんですけど、現場の保育士さんからは子どもたちが絵本を楽しむ姿を客観的に見れるっていうことと、あと自分たちの知らない絵本を図書館員が読むことで、あっこういう絵本が子どもたちすごく集中するんだなあとか、そういうふう絵本を読む子どもたちの姿を客観的に見れることで、自分の学習になるといいますか、てことを言われました。

なので、やっぱり小さな児童サービスの部分では、テクノロジーよりもやはり体温とかが分かる関係性の中で本を届けるっていう環境をしっかりと作って、それを継続していくっていうことが大事だと思います。以上です。

(委員長)

委員お願いいたします。

(委員)

今回第五次計画ということで、第一次計画開始が平成 19 年度で丸 20 年の歩みの中でもろもろ考えると、先ほどいろんな委員さんがおっしゃったように、やっぱり子どもたちの情報環境がもう劇的に変わり過ぎています。何を言いたいかというと読書活動の意義をある程度整理して、また解いていく必要があると思います。

私なりに考えれば、「読書活動とは」と訊かれると、「自分軸を整える」と答えます。情報をインプットするだけではなくて、自分がどういう人間になってどういう生き方をしたいのか自分自身に示すこと。自分が読んだ書棚を見て自分がどういう人間になりたいのかを知る、自分自身を知ることというこの 3 つを自分なりに認識しています。

そういったことをもう一度整理して、読書活動とは何なのか、読書でないとできないことは何なのかということとを丁寧に解いていく必要があると改めて思います。

学校の P T A だったりとかいろいろ関わっていく中で、先ほど委員がおっしゃったように、電子教科書のこともタブレットのことも正直小学校では早いんじゃないかなというふうに思うところもあったり、記憶の定着率でいうとやっぱり電子より紙がいいということとは、もう明らかにエビデンスがありますので、それとのバランスをどう図っていくとか、もう 1 つ言うと、先ほど委員がおっしゃったような体温を感じられる人間がいかに近くににいるのかということとで、小学校ではやっぱり多読して、本当にたくさん吸収していく時期だと思います。中学、高校のヤングアダルト層は、自分の生き方が見えてきますよね。ということは、読書の幅が狭く深くなっていくと思うので、とにかく近くの大人がきっかけになることが多い。担任の先生とか学校司書とか地域の図書館員とか親であるとか。身近なところにそういう人間がいるといないとでは当然違うと思います。人という要素はこの計画も総合的に関わっていますので、やはり外せないかなというふうに改めて思ったところです。

部分的なことを 2 つ構いませんか。基本目標Ⅲの今後の方向のところ「読書ボランティア調査の結果を基に、活動者と活動場所とのマッチングを行う」というところです。以前、子ども司書養成講座がありましたね。確か一次計画の期間中に県生涯学習課が中心になって、県内 3 ブロックで始まったという経過があったんですけど、講座を受けるんだけど、その後どこで活用していいのか分からないという意見が当時現場からありました。いわゆるアウトプットのところをもう少し整理して、各市町村でやってもらうにしてもお示ししてあげるとか、あるいは現場自身が考えるのかっていうところで、やっぱり人って目標がないと受けよう、頑張ろうと思いませんので、そこを改めて感じました。次に統計のところ、先ほどから不読率の話が出てきていますが読書活動の手段が増えてきてますよね、今。電子書籍端末があって私自身も昨年から利用を始めました。月々 980 円で 500 万冊読み放題。学校でもない公立図書館でもない公立図書館が配信する電子図書館でもないというところで今、中学校、高校でも利用する生徒がいてもおかしくないのも、統計の取り方の工夫といえますか、質問文の書き方とか、正確な数字の拾い方に工夫が今後いるなあと考えたところです。例えば、自分の電子書籍にこの 1 か月で読んだものがバーッと出てくるんですけど、回答の際にそれを本当にカウントしているかどうか。カウントしていると数字が変わって

くるでしょうし、単に図書館の貸出冊数割る人口という統計だけではなくて、読書手段がかなりおおい時代ですので、統計集計の工夫がいるなど改めて思ったところです。以上です。

(委員長)

委員お願いいたします。

(委員)

みなさんのご意見本当に最もだなと思うところもあります。もちろん新しいテクノロジーであったり時代の変化に応じてやっていかなければいけない。目標設定なども、ちょっと今後どういうふうを考えていくかっていうのもあるんですけども。1つ思うのは、四次計画でいろいろ達成できたものと達成できなかったものあろうかと思います。

今の骨子案、項目ということで受け止めておりますけども、項目の中で言うと統合ですかっていうのも多々ありますけども、基本的に廃止されるものはないんですよ。もちろんやらなければいけないことが、どんどんどんどん積み上がっているっていうのは分かるんですけども、四次計画でなかなかそこで、もしかしたらリソースの問題とかで1度も過去に成果を出せなかった部分なんていうのも、おありなんじゃないかなと思います。市町村への支援ですとかそういった部分もやっぱりそういう要素があったんじゃないかなと思います。先ちょっと積み上がってきているような印象を受けます。骨子項目として受け止めたときに。これを果たして十分成果が出せるぐらい取り組めるものだろうかというのが、ちょっとすごい言葉が悪いですけど率直に言って、嫌疑があるところです。

そしてまた、こういうふうに関んなことをやっていく、やっていく、積み上げていく。我々この読書活動推進計画推進委員会っていうのは、もちろん読書を学校であったり市町村、県内みなさんにやっていただくっていう立場でものを言っていけばいいのかもしれないんですけども、現場は多分それだけではないんですよ。いろんな学習、基礎学力も上げましょうとかキャリア教育も充実させましょうと。いろんなことがある中での取捨選択の中で、どうしても読書活動言われてること全てはこなせないっていうようなこともあるのかなと思います。

であればその項目の多さっていうこともちょっと踏まえて言うと、やはりもう少し選択と集中みたいなものがあったもいいのかな気はするんですよ。先ほど来おっしゃられていた、この学齢期、この年代じゃあ何を伝えようとか、自分軸を定めようみたいなものを柱にして、その中で本当に必要なことを政策として整理をして、より使っていただけるような計画としていくっていう視点もあっていいのではないかな。なおかつ、数値目標がある、この辺から始めていかれると思うんですけど、決して今こんだけだからこれぐらい引き上げなきゃいけない、今までの目標から下がってはいけないっていうふうには考えなくてもいいのかなと思っています。

先ほど言われたように、読書環境どうしてもやっぱり下がっていく中で、せめてここまで

はみたいな格好で設定をしていくっていうのも1つの考え方かなとは思いますが、もちろんそれを我々が言うと、すわぶりがあるっていう議論もあると思うんですけど、すごくね、いろんなことに多岐に渡ること全てが行き届いて実施できれば、いいんですが、ちょっとその辺ができるという裏付けがあるのかどうか、私判断できないので勝手なことで申し上げました。以上です。

(委員長)

ありがとうございました。それでは委員お願いいたします。

(委員)

先ほど言ったように今、職員とかも研修でしっかりと勉強していかなくてはいけないっていうのと、今まで研修でいろいろ県の研修とかでもありました。でもやっぱり実際その研修で学べるのが、何か実際自分たちが学んできたときよりも、実践で生かされるのがちょっと少ないような感じがします。

4年制の大学を出てきた新規採用で現場にも結構短大よりも最近は4年制でしっかりと学んできた職員も多くなってきたかなと思うんですけど、意外にそれでも実践で何か絵本のことを知ってるかといったら、あまり知らなかったり実践に生かされることは何か少なかったりするんで、やっぱり現場に出たときも先輩の先生方も若くなってきたので、なかなか学ぶ機会っていうのがなくて、子どもたちに与えるものっていうのが限られてくるので、研修の内容なんかも変えていくような方向もあったらいいのかなと思います。

あとはその環境としては、やっぱりお家に絵本がどれだけあるかっていうのを、アンケートで自分たちも知りたいなって、すごく常々思います。今、お母さんたちもすごくお家の中もシンプルにしていって、あんまり無駄な物を置かないような家庭なんかも増えてきていて、本当に絵本も極々少ないじゃないかなと思います。

月1回、薄い月刊誌っていうのを毎月取るようにしてます。その本ですら、何年かすると破棄するとか悲しい現実もあったりとかして、やっぱり無駄っていうふうに思われてしまうんだな、伝え方も良くなかったのかなってすごく反省するところでもあるんですけど。やっぱり何年経ってもその絵本っていうのは、小学生になって中学生になっても振り返って見たりとかするよさがあるから、そういうよさがあるっていうことを伝えていくことが必要だし、本当に絵本とか手に触れるものが少なくなっているように感じます。

ちょっと内容が外れるかもしれませんが、次期計画の改訂に向けて1つ出てきたのか、言葉を用いて思考を深めていくっていうのが、幼児期からやっぱり必要ですよっていうことを今、言ってます。ICTとかで、いろいろすぐに得えられる情報ってあるんですけど、やっぱり大事なのは図鑑とかで実際に自分が広げて見て、何ページもめくってみてっていうことの方が、子どもたちには残っているような気がします。なので、やっぱり映像とかで得られることも大事ですけど、適材適所っていうかそれも載ってないときには調べて、先

生たちが見せるんですけど、まずは図鑑を何冊もこれには載ってないけど、こっちには載ってるかもしれないし、図鑑をいっぱい引っ張り出してきて調べたりとかして、そこから何か興味・関心が広がっていくとか深まっていくっていうこと大事にしていこうとしているし、言葉ってというのは、絵本から得られる情報ってというのがすごく大事だと思うので、そういうことが国語とかの読解力とかにつながっていくっていうことなんかも幼児期からしっかりと保護者の方に伝えていくっていうことが必要かなって、すごく計画の改訂とかを知ったときに思いました。

やっぱりこう読書離れってというのは、やっぱり考える思考っていうことが簡単にできすぎるようになってるので、子どもたち自身が考えることを苦勞をしなくなっているっていう現実があるので、そこなんかもお母さんたちに現場の様子なんかも伝えながら、分かりやすく説明していくことが必要かなと思いました。以上です。

(委員長)

委員お願いいたします。

(委員)

失礼いたします。第五次の推進計画案で私個人として非常に期待しているところが、これは本当に個人的な事情によりますけど、新規の「日本語を母語としない子どもたちが利用しやすい資料の充実」というのが、たまたまですけども、令和10年4月から普通科における多文化共生コースという日本語指導が必要な生徒の受け入れ体制を急ピッチで進めているところです。ぜひいろんな機関と連携しながら、そういう環境の整備も連携させていただきたいなと思いましたので、非常にここは期待をして計画を見守っていきたいと思います。

加えて、特にやはり若者の読書活動。いろんな議論の中であることなのですが、例えばビブリオバトルの話なんかもずっと出てるんですが、それを継続的にやるべしなのか、あるいはもっと拡大発展的にもっとこんな取組ができるのではないかという多方面から議論が必要かなと。それはもう学校現場でも手法に頼らずに目的をしっかりと見定めながら、先ほど申し上げましたけど、なぜ読書の意義というか、なぜ読書なのかということを問い続けるような環境があったらいいなあとは思ったところです。

全体を通じて1つ思ったことが、この基本目標Ⅰ「多様な子どもたちの読書を支える」。多様な子どもたちの読書を支えるのか、場合によっては、子どもたちの多様な読書を支えるのか。これ両義なのかなあと思いながら考えてました。ともすれば今日の話題は、子どもたちの多様な読書を支えることが主体になるようになっていく気もします。その中で出てくる、例えば生成AIとの付き合い方なんていうのは、大いにここで議論されるべきだと思います。

もう1点です。これはちょっとこっちズレたことになると思いますが、県全体の子どもたちの状況下から振り返ってみて、やはり今後さらに急激に少子化が進んでいくというのは

明白な状況です。でもこれはあらゆる学校だけでなく、いろんな地域の中で現場の中でもう本当に避けることのできない大きな課題として、しっかり考えなければならないことです。やはり読書との関わり、先ほどから情操の面もあるかもしれません。思索を深めるための大きな役割としても、読書はその役割を果たすならば、なお一層今高知県の課題としてはもうこれ避けては通れないかなと思います。そこにどういう環境が必要なのかも考えたいところです。

それからもう1つ言うと、デジタルとアナログという議論じゃなくて、両方ともしっかり読み込んで、今後迎えてつあるその大きな課題に対して、どう対応していくのかっていうことが必要なと思いました。

ぜひできれば、そういった社会課題なんでしょうけども、少子化っていうのは。けどもやはり、そこにこういった教育活動がどれだけ大きな役割を果たすのかという視点で見ていただけたら、これもまた大いに関わる人々にとってみたら、勇気の湧くところだと思いますので、ぜひそういった点も含めていただけたらと思います。以上になります。

(委員長)

ありがとうございました。

みなさんのご意見をお聞きになってコメントがありましたら。少し時間がありますのでお願いいたします。

(副委員長)

ありがとうございます、みなさん。本当にいや僕もやっぱり読書の時間であるとか量であるとか機会を設けるということが必要じゃないかというふうに考えてたけど、やはり先ほど委員も言われたように、やっぱり何で読書の大事なところをやっぱり伝えていくっていうのは、これは多分根本的にはやったらいいかなと。子どもには結構それを熱持って言うっちゃったらストンと落ちるかなと。でも本当にそればかりやることはないと思うけど、そこはまた子どもが選択していくと思うけど。でもそこはちょっと抜けてちょっと弱かったかなっていう気はします。

その中これをばっかりやるんじゃないで、やっぱりその心というか、考え方をちょっと落としたら、もっといいかなっていう気が、すごい僕は感じました。ありがとうございました。

(委員長)

せっかくですから1つお伺いしたいのは、今の教員の方々に、子どもに読書の楽しさを伝えるだけの読書をする時間はあるんでしょうかということです。これが一番気になります。

やっぱり読書の楽しさってのはお手本があって、その話を聞くことは大事なんですね。教員の方々は本を読む時間というか、仕事を離れて本を読んで楽しむ時間が取れるのかどうかっていう、そこがかなり大きな問題だろうと思います。正直なところすみませんが。

(副委員長)

中学校の朝読のときは必ず教員も自分の好きな本を読みよということを伝えてましたけどね。多分担任はその10分間、1週間のうちの半分。その5日間。前の学校では5日間朝読書をやっていたので。そのときだけは、やっぱり先生も落ち着いてというか自分の好きな本を読みよったような気がします。

ただ今、小学校では読んでないと思う。先生が本読みゆうがは、ごめんやけど見たことは1回もない。それをやりゆう暇ないのが現実やと思ってます。暇ないという言い方はおかしいですけど、要するに教員やることすごい。それで多種。ものすごくあるので、何か子どもには読んじょきよ、頑張って読んじょきよやけど、自分ら読んでいるところはないなあ。やっぱり大人が率先して読みよってこの本いいぞって読んでいると、子どもが見たら、ああそうかってなるかなっていう気はします。というのが、これ現実です。

(委員長)

ありがとうございます。やっぱりね、そのあたりから本当に考える必要があるんです。なぜそういうことをお伺いしたか。子どもだって、俺だって忙しいっていう、読書の暇がないんだという子がいたらどう対応するかとかいうことを考えなくてはならない現状があるんじゃないかという気がするんですね。

そのためにも、せっかくボランティアで読書活動の支えていただける方がないんですね。それこそさっきご指摘もあったように、ミスマッチがあって、せっかくのボランティアの能力を生かせないっていうことがあって、これはまずいだろうと思いますね。それは問題でも指摘されてますので、そのあたりは今度の計画では、きちんとやっぱり見通しをつけるべきじゃないだろうかと思います。

あと時間がまだ30分ほどありますので、みなさんの意見をお聞きになって、また新しい案が浮かんだと思いますので、どうですか。また何か新しくご意見よろしくありましたら、受けておきます。なんでもかまいません、どうぞ。

(委員)

やっぱり本の世界って建築みたいに、サッとかみんなが認識できるような、何かができるっていうものじゃないと思うんですね。やっぱり人の心にみたいとか、そういうことなので、本当は実際どこ行っても優先順位がとっても低いです。何か削られるって言ったら図書費だったりとか、そういうことがあったりして。なのでやはり、これからは連携っていうところ、そういうところで図書館であったり、本に関わるところっていうところがサポート役になったりとか、時にはリードしたりとかっていうところで、もういろんな機関と連携してやっていくっていうことが、生き残りでも必要じゃないかなと思っています。

それからこれは質問なんですけれども、こういうふうに非常にボリュームのある計画を

立てていく中で予算的なものですね、そういう現状維持の中でやられていくんですかね。やっぱり現場にはそれ相応の図書費っていうものがあつた方が、子どもたちやっぱり本っていうものを直結するものが面白いものがたくさん入ってきた方が面白いと思いますし、支援員さんなりにしても、より各校に支援員さんがしっかり付けられれば、学校の先生もすごく助かると思うんです。

なのでそういう意味の環境にける予算っていうものは、組まれているのかどうかっていうところをお聞きしたいと思います。

(委員長)

お願いいたします。

(事務局)

残念ながら生涯学習課もいろいろと減らされるだけで、新しい取組っていうとお金がちよつとなかなか取れないっていう現状があります。

国が何かするときに国の補助金が出るに合わせて昨年度まで本との出会い事業というので、本をお配りしたりとか、そういった、国が何かしてくれたらそれに何か重なるものがあれば、それを使って提供っていうのはあるんですけど、この計画のために何かっていうのは、ちょっと今のところ考えられてない状態です。

(委員)

分かりました、ありがとうございます。

(委員長)

委員、お願いいたします。

(委員)

今おっしゃった計画と予算のことでヒントになるかどうか分かりませんが高知県社会教育委員会は、2年に1度提言書をまとめています。社会教育という大きいテーマで。前回は「これからの社会教育と若者世代」、その前が「新しい生活様式の中での社会教育の在り方」でした。提言書をまとめて2年1度、県の教育長さんや教育委員さんと懇談を設けます。その中で、社会教育における意義を示し、県の教育施策の基礎にしてもらうんですね。提言書をまとめることで、あるいはそういった懇談をすることで。

説得力をテクニク的に持たせるというか、予算のことも既存の教育大綱や教育振興基本計画とこの子ども読書活動推進計画の紐付けをどうしていくか。図書館の場面でもあると思います。例えばサービス計画とか図書館振興計画とか、そういうことを紐付けて点をいかに面にして施策の推進や予算の獲得に結びつけていくというのが理想かなというふ

うに勝手ながら考えております。

なので、この計画だけが単独で動いているわけじゃないということです、大事なところは、大きな枠組みの中に持っていくことです。

(委員長)

その他いかがでしょうか。よろしいでしょうか。あとそうですね、20分ぐらいまだ時間があります。じゃあ少し私のコメントといいますか、感想といいますかを述べさせていただこうかと。そのあとでまたご意見を頂けたらと思います。

やっぱりまずこの先の5年間をどう考えられてますか、どう予測するかっていうことですね。

これはもう社会全体から文化全体の問題で、こんな委員会でのごたごた言うレベルじゃないということかもしれませんけど、それにしてもやっぱり子どもを取り巻く読書環境の変化がどうなるかは、ある程度見通しをつけておかないことには何も話が進まないだろうと思います。もちろん生成AIをめぐる環境、それからやっぱりデジタル教科書の導入も、かなり大きな影響が読書にはあるんじゃないかと。そのあたりをやってみなきゃ分かんないっていう態度では、ちょっと済まないだろうと思うわけですね。ですから、どの程度のことが起こりそうで、どういう対応がよいだろうかということを見通した計画にしていきたいということです。

それから子どもの数の減少というのも、これも明らかで、いわば計画の対象者の数がどんどん減ってしまうわけです。しかもその減り方は全県下一様ではなくて、市町村によって随分違うわけですね。それこそ市町村の存立が問題になるような地域から、当分持つところまで様々です。新しい図書館が建つところもあるし、ますます委員の先生方が今おっしゃったように、3つのうちの一番問題の方へ転落していくところもあるわけですから。そういうことを考えるとかなり難しいですけども、計画の5年間、令和9年度からの見通しを立てておく必要がある。その間で、予算の問題も出ましたけども、スマートシュリンクの枠組みの中でそれを行うということも絡んでくる。だから非常に難しい時期に計画を立てることになったなあというふうに思います。

ただ生成AIとの共存は、これも避けられないし、子どもたちが生成AIを活用できるぐらいの力を付けてやらねばいけない。そのための基礎になるのは、やっぱり言語能力だろうと思います。

それこそ質問1つを書くとか、そういう時にしても言語能力があるなしで答えがガラッと変わってしまいます。ましてや、生成AIの出した答えを字面は分かっても意味が分からないような言語レベルでは、話にならないっていう、そういう時代を子どもたちは生き抜いて、それから将来仕事をしなきゃいけないわけで、そのために必要な豊かな言語能力をどうやって付けてやるかということになると思います。

そういう時代が要求する言語運用能力。これを、だからどの程度に我々が設定したらよい

のか。せめて、例えば文学の古典が読めるぐらいにあってほしいとか、例えば今、旧字体で書かれた本とかあったら、もうそれだけでエッていう感じで拒否反応ということ。それはそれでいいのかもしれないけれども、それではあまりにも悲しいではないかというのが多分我々の世代の思いだろうと思います。

でも子どもたちにとっては、それどころじゃないしネット上にそんな文字は存在しないというような反論もあるでしょう。ところがよくネット上のいろんな動画とか漫画を見ていると、妙にサムライ言葉が出てきたりとか、まず使わないような漢字がポコッと出てきたり結構してるんです。

だから、非常に、何て言うか、マニアックな部分や、非常に簡略化された言葉で、何て言うか、短くして、とにかく意味を伝えようとするとか、妙な様々な動きがあるわけですね。そういう中を子どもたちが生き抜いていくためにも、本当の意味で豊かな言語能力を備えさせてやるのが一番大事だろうと思うわけで、そのための計画であってほしいというのが、一番、今、個人の思いとして強いわけです。

言語能力が豊かであれば様々な問題、つまりコミュニケーションの失敗によるトラブルが多分ずっと減るだろうと思われるわけです。ほとんどの多くの問題は言葉のやり取り、コミュニケーション上のトラブルっていいですか、字面は何とか分かっても、要するに簡単に言えば意味が分からないってことです。それは例えば、読書体験、例えば小説を読むことによって、いろんな疑似体験をすることでその豊かな感性を養うとか相手の心を慮るとか、そういうことのトレーニング、経験ができてないわけですね。言葉の壁があって、ここから先はあなたの世界、ここから先は自分の世界だからね、これ違う、自分の世界だから、じゃあここで境界を設定しましょうねっていうその中で、お互い生きていきましょうねっていうような世界でのコミュニケーション能力ではこの先、子どもたちが生き抜けないだろうという気がします。

ということは日本が何て言うか、文化的にも経済的にも成長は望めないということですけど、それはさすがにまずかろうと、そういう意味でも、とにかく豊かな言語能力を育てる。人と人とのコミュニケーション能力が高まるそういう言語能力を養えるような、そういう読書を考えていただきたい。

そういう面から、読書体験を通じて自分の言語能力が高まったと、それを例えば、いろんなところで体験できるような、そういう枠組みを作ってほしい。読書活動がいいとか悪いとかじゃなくって、実際に本を読んでみて、何か変わったことがあるのかと、そういう体験を語る、やっぱり、大人がほしいというのが本当じゃないでしょうか。そういう上で、計画に盛り込むことがたくさんあるし、本当は本質のよいところで変わるわけじゃないですけども、やっぱり時代への即応とその時代に生き抜かなきゃいけない子どもたちの基礎的な言語能力を高めてあげるってことです。それは、情報技術の進歩によって様々な多様な読書が可能になるし、望ましいことなんだけれども、読書が持っているっていいですか、言語を使用するということの持つる本質は忘れないような、そのところを理解しても

らえるような計画っていう、いわゆる抽象的なところばかり考えてるんですよね、この頃。そこを何とか頑張ってほしい。

あと具体的には、これから計画を作るメンバーを固定されることになると思いますけれども、こういう計画を作るときはとにかく若い人を入れてください。正直なところ、これからを担う人が自分たちのための計画を作るべきだろうと思います。

高齢者はいろんな経験を語ることができますけれども、若い人がやりたい方法でやってもらう方がいいだろうと思うんですよ。その時に多分、様々なコミュニケーション上の言葉のやりとりの問題、多分高齢者、年齢の上の方と若い人の間でコミュニケーションのギャップが生じて、ああこういうことなんだということを経験されると思う。そこを生かしてこういうのを乗り越えるための読書活動の推進計画ってのはあり得るんじゃないかと、そんなことを考えていただきたいとずっと思っていました。以上です。

事務局の方からその辺に関してのご覚悟をお聞きしたいっていうのが本音です。一つお願いいたします。

(事務局)

若い人メンバーに入れてほしいっていうのは、こっちを作る側、ここの作る側の話でしょうか。今後、ほかの委員、協議会とか開催するときに、委員会のメンバーとかを…。

(委員長)

これから計画作成されるわけでしょ。その時にメンバーができる限り若い人であってほしいというのが私の願いです。

(事務局)

事務局側のメンバーは若い人を取り入れて、若い人の意見も聞きながら。

みなさん、よろしいですか。

(委員長)

例えば今年度採用された方とか、一番問題に近い年代でもあるし、それから読書をどう考えてるかっていうことでは、一番この計画の対象者に近い年齢の意見をお持ちのはずです。考えとか経験も。そういう方々が、この計画の策定に参加されてなかったら、我々は目の前にある現実をちょっと置いて、理念的なことばかり考えすぎる傾向になりはしないのかっていう、そういう危惧があるわけです。

だって、さっきおっしゃってましたよね。先生方がもう本に関して考え方が、絵本に関して考え方が全然違うと。でも、それは大学生を見たら分かります。そういう人がちゃんと試験に受かるような仕組みになってるわけです、はっきり言うと。

だから同じような形で、一番何ていうか、採用されてからの期間の短い若い人の、それこ

そ右も左も分からないようなくらい経験の人の読書に関する意見を参考にするってのは、悪いことじゃないと思うんです。

だから、これは上の方でまとめますからってことでは、子どもたちの読書の現実を本当に反映した計画になるとは、ちょっと思えないっていう、そこをどうお考えですかってことです。

(事務局)

失礼します。まずは教育委員会の中でも、この担当以外も若い職員等いますんで、そのような、若者の意見等も聞きながら計画策定の方には取り組んでいくようにしたいと思っております。

(委員長)

という返事だろうと思ったんですけど。

ですから、パブリックコメントを受けようっていう内容について、一番この計画の対象としている年齢の方の意見が参考意見程度でいいだろうかっていう思いがずっとあるんです、私には。

要するに、実際の子どもたちが願う読書環境とか、それから、読書をしたら得られるもの、価値というものが、本当に生かされた計画になるためには、対象となる年代の、やっぱり、価値観とか世界観みたいなものを少なくとも理解する必要がある。その善し悪しの判断は、すぐには何とも言えませんが、それは大いに大議論して、こうするべきだろうと、やるべきだろうと思いますけど、とにかくその意見をきちんと把握するっていうところは、やってほしいと思います。その辺がないとふわふわした感じの宙ぶらりんな計画になりはしないかという気がします。

実際の対象となるような子どもたちは、読書に集中したいのかもしれませんが。でもそんなことしてたら、ほかのことができないじゃないですか。何でそんなことが分かってくれないんだと言われたときに、どう答えられるかっていうことです。その辺りは、もうちょっと、計画作る方が経験も豊かだし、やっぱり考えるべきじゃないかなあとずっと思っていました。

それから、これは、随分前からみなさんよくご存じだと思いますけど、結局子どもの読書を推進しようとする、かなり家庭の問題も考えなくちゃいけないという実情が出てくる。それも、やっぱりどの程度向き合うかっていうと、かなりの覚悟がいる。効果を上げるためにも、そのあたりも必要だろうというのが、私の変わらぬ持論です。反論も多いだろうとは思いますが、そのあたりのことです。

ですから、こちらの都合じゃなくて、あくまで子どもがこの計画で5年間育ったら、その5年間に有意義なものと感じられるのか、そういう成果を期待できる計画であってほしいという願いです。

本来、これ、子どもの読書を考えるというのは、楽しい計画なんですね、やることです。子どもの将来を、こんなに豊かにしてやりたいという、そういう思いを込めて書くものです。そのために、やっぱり作る側が嫌な思いもし苦勞もするのは、これは仕方がないと思います。大いに議論していい計画を作っていただきたいと思います。例えば読書をしたりして。

その他、少し。まだ10分弱時間がありますので、私の意見に反対な方もおられるでしょうけど、どうぞコメントありましたら。

(委員)

そうですね。もうだいぶ、練られた計画なので、これが叩き台になって策定に向けて進んでいくと思います。

1つもう本当に他愛のないことということで受け止めいただきたいんですが、この基本目標Ⅱが前回同様の目標設定になってますが、実に今日の議論でも非常にここが中心かなと思いますけど、情報のやり取り、活用できるっていうのが具体的にどう考えればいいのかという局面かなと思いました。

いろんなご意見伺っていると、まさにこれも何のために情報を自分なりに取り込んで、それを個人としてどうしたいのかっていうのがないと、情報の意味がないのかな。つまり、ある意味考え方とか生き方の指針になるような、そういう主体性を持った言語活動といえますか、言語能力。これをしっかりと身に付けていくんだっていうことが大切なのか。活用という言葉にいろんな意味が込められてるのかなあといいながら見てました。単なる情報整理能力は先ほど来出て、もう本当に生成AIに圧倒されるのではないかなと思います。それにもう飲み込まれていくだけじゃないよねっていうことを、学校の中でも呼びかけるとするならば、本当に個人として生き方の探索をやはりこういうところを拠り所に先人の生計をしっかり戻っていく1つのツールとして、これほど効果的な手法はないんじゃないかとかいう投げかけを私だったらこうして、そこから指導に入るのかなあみたいなイメージを持ちました。非常に重要な点です。

あと、これも作りのところなんですけど、前回は「育てる」っていうのが2つありました。今回「支える」っていうところで2点設定をされてます。基本目標Ⅲ「基盤を支える」、まさに今までよりも、ここ細かいところなので、そんなにこだわらなくてもいいのかなと思ってますが、「支える」っていうのがここも同様に基盤を支える、これ要は社会インフラとしての読書とか図書館の存在意義みたいなことなのかなと思うんですが。「支える」ことで、ちょっと屁理屈ですけど、「支える」ことで、まさに子どもたちは、どう育っていくのかなっていうことも思いました。前回の設定の中で「育てる」っていう言い方が2か所出てきたんで、基本我々はやっぱり人格の基礎を形成していくことを教育活動の一番の大本に置くので、「育てる」っていう言葉に非常に反応するなというところで、ちょっと述べさせていただきました。すいません、全くまとまりがつかみませんけども、ちょっと思いついたところでございます。以上です、ありがとうございました

(委員長)

ありがとうございました。その他、よろしいでしょうか。

まだいろいろご意見がおありでしょうけど、何かお気づきの点がありましたら、また事務局の方へご連絡頂ければと思います。事務局も、その辺の対応よろしく願いいたします。大事な内容の計画策定ですので、とにかく大議論をして、まとめていただきたいと思います。

それではあと、一番最後のスケジュール案について、事務局からのご説明をお願いいたします。よろしく願いいたします。

【説明】第五次計画の策定に向けたスケジュール（資料５）

【質疑・協議】

(委員長)

スケジュールについてご質問等あれば伺いますけれども、よろしいでしょうか。

はい。それでは議題の３その他について、事務局から何かありますか。

【説明】議題（３）その他

(事務局)

今回はその他については、議題ございません。

(委員長)

ありがとうございました。

それでは予定しておりました時間になりましたので、議事はこれにて終了させていただきます。